



中川雄一郎 監修
農林中金総合研究所 編

協同で再生する地域と暮らし
豊かな仕事と人間復興

市場経済のもとで競争を促進し、経済効率を高め、経済的充足を図ること。これを最も望ましいこととする時代が続いた。結果として、人々のやすらぎと心の豊かさが失われ、精神の病が広がり、同時に地域社会の崩壊が進み、閉塞感・不安感が強まっている。自立した個人の協同で、地域と暮らしを再生しなければならない時がきた。では、再生の道をどう進むか。

その問題意識で研究に取り組んだ農林中金総研のチームが、成果をまとめ、広く読まれる期待を込めて市販した本である。総研の専任4人、外部の研究者3人が執筆。総論的な序章・第1 - 2章・終章と、各論のテーマ別事例検討(第3 - 6章)及びイギリス等・イタリアの事例検討(第7 - 8章、セクションのタイトル「...との事例比較」だが「比較」の議論はない)という構成。各論のテーマを簡略表記してみると「女性と高齢者の起業」「行政と新住民組織の対応」「農協視点」「地域通貨」。

その問題意識に私は共鳴する。しかし私の日常の実生活は地域社会と無縁であり、また問題意識はあってもそれによる研究を日常のものとしていない素人である。だから、積極的に発言する資格がない。だが求められて感想を述べることは許されよう。問

題意識に共鳴するとき、それは義務かもしれない。ということで、感想を記す。

*

この本にあげられている参考文献の数からうかがえることだが、その問題意識での研究の蓄積は、相当なものである。そうしたなかでのこの本の独自性は何か。

この本の「帯」に「...桎梏の共から...奔放な協をめざして!」とある。それを切り口とする独自性。だが率直に言って、この本の中身は、それを切り口としていると言えそうにない。

独自性について、ほかには、この本は何も語っていない。そこで私にとっての、この本の独自性は何かを考えてみる。この問題意識での研究の蓄積は相当なものだが、いくつかのテーマを含んだ、包括的な本はそれほど多くない。この本はその一つである。そして、素人にとって、考えを深める手掛かりとして有益である。そこに独自性がある。私はそう思う。つまり、広く読まれることを望みたい本である。

*

気になったことを少し記す。

1 序章に「市場経済化の本質と地域社会の崩壊」という見出しの、「近代資本主義」「現代資本主義」をキーワードにした議論がある。その議論に異論はない。しかし、歩を進めての時期区分の議論は欠けており、この本全体としてその視点は弱い。素人の読者として大いに不満である。

高度経済成長期を始点とするのが普通であろう。その後、地域社会の崩壊の現実と、関係する政策とは、いくつかの時期に区分できる展開をしている、と素人は、いや、素

人でも思う。それを問題にしなくてよいのか。なぜ、問題にしないのか。

2 地域社会の崩壊には、それをもたらず力の作用がある。社会・経済の仕組みと政策の力。とするとき、地域社会の再生には、その力とくに、具体的に目にみえる政策の力の作用から「守る」努力を欠かせない。ところが、この本には「守る」という表現は一度も出てこない。

第2章に、実質それを思わせる表現＝視点がある。地域社会崩壊の「切羽詰まった」必要に迫られて自治体が動く（54ページ）。「守る」動きである。

しかし「切羽詰まった」という状況認識は、他の章ではほとんど見受けられない。だから「守る」という表現が出てこない。

「守る」一色であるべきだ、と言おうとしているわけではない。「ゆとり、やすらぎ」を求めることなど地域社会再生の努力は多様であって当然である。その一つとして「守る」がある。この本でその視点がほとんど欠けているのは、なぜなのか。

*

農林中金総研のチームの作品だから、当然に「農協」視点が示されている。第5章がその議論であり、ほかに随所で、農協（及びより一般的に協同組合）への言及がみられる。しかし、この本は「農協」視点を軸にしたものではない。第5章の内容は「農協」視点の議論の一端にとどまる。それを軸とした研究は、このチームにとって次の課題とされている。

その課題に取り組むうえでの勘所について、簡単にでも感想を記す必要を感じる。しかし、それを取り止めにして、次のことを記す。

農林水産省が4月に「『食』と『農』の再生プラン」を公表し、そのなかで「農協改革の促進」を唱えた。9月下旬に「農協のあり方についての研究会」を発足させ、農協を指導しようとしている。今、なぜ、役所が？まことに問題のある事態、と私は思うが、立ち入らず、次のことを指摘する。

役所は、促進すべき農協改革の内容として何を考えているのか。これまで散発的に伝えられてきたものをみると、市場原理・経済効率を基本視点とするものばかりである。例えば、激化する競争のなかで生き残るために、企業界の先進手法を学べ、と。しかし競争相手の手法をいくら学んでも勝てない。これが常識であろう。

生き残るためには、競争相手にない農協が独自に持っているものを抛り所にしなければならない。それは何か。組合員さらにはより広い地域住民による「地域再生」の活動である。農協は、生き残るために、というより組合員（地域住民）の人間としてのニーズに応えるために、その活動に関わり、それを抛り所にすることを強めなければならない。その方向での農協改革。

「地域再生」を主題とするこの本は、そのような農協改革に取り組むうえで重要な参考になる。改めて関係者に、この本を読むことを勧めたい。

日本経済評論社 2002年10月

2,200円(本体価格のみ) 282頁

(国学院大学名誉教授

三輪昌男・みわまさお)